「数値予報」

岩崎俊樹 著

共立出版，1993年12月発行，115頁，1,494円

情報フロンティヤシリーズ２巻とし情報処理学会の依頼で出版された本である．依頼側の意図は情報化社会でコンピュータと人間さまがどう触れ合っているかを紹介したいということらしい．カッパブックサイズの手のひらにのる小冊子である．情報技術がメカの解法，組織のくみたて，情報の伝送など，いろんな大衆の用途に使われるようになった．コンピュータの元祖は天気予報だよといってもピンと来ない人も増えてきた．

こういう時に天気予報にあずかる気象庁関係者から「数値予報」という本ができたのは大変意義あることとおもう．前述のとおり数値予報の専門書を狙ったものではない．コンピュータと人間さまの接点をえがくのが主題だからである．またもう一つは，気象庁の「数値予報」を作る過程は外部の者にはあまり見えない．しかし，これが非常に人間様と関わり合っていることを知らせてくれるからである．

人々の目には「数値」という用語がいかめかしく映るだろう．しかし，それをあえて使うのが著者の核心ではないかとおもう．「天気予報のためのコンピュータシミュレーション」ではなく，そのものずばり「数値予報」とは何か，どうして作られるか，である．腰を落ち着けて，“どのように”作られるかを著者とともに考えながら読んでくれたら，本の有り難さが分かるのではないかとおもう．

ケアレスな数値の読み違いがとんだ予報結果をうむ事になったり，観測のないところをいかに補外するか，世界中のデータ収集ネットワーク形成のためにどんな苦労があるか等，人様のなせる業（わざ）がすべてこの「数値予報」の中に入ってくる．この事を往々にして一般社会人は知らないと思う．

一方，「数値予報」とは何かということに対して，ひとつの数値的な予測をしめす事だとひらたく謙虚に受け止めている姿勢が感ぜられて，共感を覚える．あくまでも，予報をだす人あるいは将来の予測をたてたい人に，数値予報の結果は一つの規範として使われてほしいという気持ちが込められている．予報モデルの構成や初期条件としての観測値の質によって予報結果は大きく違う．また，どんなに努力してもどうしようもないカオス的な問題もある．こういうことを理解してもらえる人にはその謙虚さの意味がわかるのではなかろうか．

本著は，１章．数値予報のしくみ，２章．観測データから初期条件を作る，３章．現在活躍している数値予報モデル，４章．数値気象情報をどう使う，５章．数値予報事はじめ，６章．数値予報のこれから，という構成になっている．一般社会人への啓蒙書としてだけでなく，われわれ気象関係者，研究家の人々にもわが身辺を顧みるという意味で一読に値するとおもう．

（琉球大学教養部　石島　英）